様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３６００５２

研究課題名（和文）近代日中女性関係史におけるジェンダー構築の総合的研究――竹中繁を中心として

研究課題名（英文）General Research on Construction of Gender in the History of Relations between Chinese and Japanese Women during the Modern Period: Focusing on Shige Takenaka

研究代表者
山崎　眞紀子（YAMASAKI, Makiko）

日本大学・スポーツ科学部・教授

研究者番号：００３６４２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東京朝日新聞社初の女性記者であった竹中繁（1875-1968）の活動に焦点を当て、彼女が日中女性の交流の歴史において果たした役割を検証するものである。竹中繁は、1926年から27年にかけて中国を旅行した。まず神戸から船で大連に渡り、そこから中国の主な都市、ハルピン、北京、天津、済南、青島、上海、南京、蘇州、そして香港などをめぐった。
本研究は主として、竹中繁が中国旅行中ほぼ毎日記録した日記の分析を通じて、日本と中国の女性の交流において果たした特異な役割を分析した。竹中の日記に詳しい注釈を付し、本研究の成果として2017年度に刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the activities of Shige Takenaka (1875-1968) who was the first female journalist for the Tokyo Asahi Shimbun. We also examined her role in the history of Japanese-Chinese women’s interaction. Shige Takenaka traveled China from 1926 to 1927. She left Kobe to Dalian, and from there she went on to tour all major cities in China, such as Harbin, Beijing, Tianjin, Jinan, Qingdao, Shanghai, Nanjing, Suzhou, and Hong Kong.
We mainly analyze the unique role in the interaction between Japanese and Chinese women by analyzing the diary written by Shige Takenaka almost every day in her travels in China. We are going to publish the achievements of our research with annotations on her diary in 2017.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：日中女性関係史　中国女性史　女性記者の海外体験　日本文学者の中国体験　1920年代の中国の女子教育

１．研究開始当初の背景

（１）出発点

日本近代文学研究者（本科研の代表）と中国近代史研究者（分担者と研究協力者）、および中国近代文学研究者（研究協力者）など本科研のメンバー5 人で、日中女性交流史をジェンダーの視点で学んでいく研究会を開催していたことが、本研究の出発点である。

（２）研究メンバーの研究背景

本研究は、上に挙げた日中女性関係史の研究会から生まれた。

研究代表者・山崎眞紀子は、明治・大正期に文壇の第一線で活躍した作家・田村俊子の研究で博士の学位を取り、著書に『田村俊子の世界』（彩流社、2005 年）がある。博論以降、田村俊子の北米時代と中国時代の研究を行っており、近年は特に日中戦争下の上海で、1943 年から 1945 年の 3 年間毎月田村俊子が編集発行人として刊行した中国人女性のための雑誌『女声』の研究を行っていた。中国女性史の研究者の知見が必要となり、本研究会の発足の契機となった。

石川照子（研究分担者）は近代中国史およびキリスト教史が専門で、これまでに「近現代中国におけるキリスト教―ジェンダー変容の視点から」（『経済史研究』大阪経済大学日本経済史研究所研究紀要、第 16 号、2013 年、1～24 頁）、「辛亥革命後の宋慶齢と日本」（大里浩秋・李廷江編『辛亥革命とアジア―神奈川大学での辛亥 100 周年シンポ報告集』御茶の水書房、2013 年、262～271 頁）などの論文を発表していた。特に中国における女性の近代化において重要な人物である宋慶齢の研究会に所属しており、また、ジェンダー史学会に所属し、中国人女性のジェンダー構築に詳しい。

藤井敦子（研究協力者）は中国女性史・中国文学が専門で、「民国期中国における知識人の「新式結婚」とその後--趙元任・楊步偉夫妻を例として」（『藝文研究』第 94 号、2008 年）などがあった。中国の若い女性が抱く「結婚」観に詳しく、また、若年層の中国、台湾の文化風習を織り込んだ翻訳なども手掛けている。

姚毅（研究協力者）は中国女性史および現代中国史が専門で、特に出産に関する研究で学位を取得し、『近代中国の出産と国家・社会―医師・助産士・接生婆』（研文出版、2011 年）として出版していた。中国の若い女性のおかれた社会、その中で特に重要事項としての結婚、そして出産は女性の大きな関心事であり、ジェンダー構築の大きな要でもある。

須藤瑞代（研究協力者）は、清末から 1930 年代にかけての近代中国女性史が専門で、本研究の中心である竹中繁に関する研究も地道に進めていた。「女性記者竹中繁の見た中国女性たち――1920～30 年代を中心に――」（『中国女性史研究』第 17 号、2008 年 2 月、89-111 頁）、「女性と国際交流――竹中繁と日中女性の連帯」（平野健一郎・古田和子・土田哲夫・川村陶子編『国際文化関係史研究』東京大学出版会、2013 年、408-430 頁）などの論文があった。

以上の４名は、軸足を中国において研究を進めてきており、研究代表の山崎は、日本近現代文学専攻なので、他ジャンルとの横断的な共同研究を行うことの意義は大きかった。

（３）研究会の経緯

女性記者の竹中繁の中国日記研究を開始する前に行っていた研究は以下のとおりである。

日中女性関係史の研究の基礎固めとして、「アジア女性交流史」の視点による研究を進めた。山崎朋子『アジア女性交流史　明治・大正編』（筑摩書房、1995 年）と山崎朋子『アジア女性交流史　昭和前期編』（岩波書店、2012 年）をそれぞれ 3 か月に一度程度の研究会を 2 年継続した。この後、本研究の竹中繁の中国日記の研究に入った。メンバーの須藤は竹中の所蔵する資料を保管している遺族と信頼関係があり、私たち共同研究会全体での史料が閲覧可能となった。未公開史料を判読、整理、データ化していくには、経費も必要であり、科研に申請した。

２．研究の目的

（１）研究対象の史料整理

女性記者という自立した経済力を持ち、社会に貢献した女性の史料の整理、とりわけ彼女が残した中国日記を通して、女性同士の日中間の交流が何をもたらし、ジェンダーを構築していったのか、竹中繁が所蔵していた数々の史料を通じて検討していくことを目的とした。

主軸は 1926 年から 27 年にかけて女性二人で中国の沿岸部の主要都市を周り、特に女子教育の機関や女性運動家などの要人と面会し、それを記録した日記を分析対象とし、そのための資料整理、データ化を図ることになった。彼女の構築した中国人女性との交流は、未公開資料として遺族のもとに置かれていた。その整理を行うことを第一の目的とした。

（２）史料化

整理が済んだ史料を生かすこと。

手帳に残された女性記者・竹中繁の肉筆による中国日記を判読し、ワードに入力した日記の内容を注釈し、当時の時代の文脈の上に置くこと。竹中の旅の同伴者は中国語に堪能で中国でも教育経験もあり、帰国後は中国からの留学生の面倒を見ていた竹中の友人であった。埋もれていた貴重な日記の注釈を加えることで広く史料として公開できる形を調えること。

（１）　史料を生かした日中女性交流史の分析

上記の史料に加え、日記に記され交流のあ

った人物の書簡（竹中繁の遺族が所蔵）などを整理し、特に竹中繁と交流のあった中国人女性との手紙を通して交流史をまとめること。

他にも竹中が日本国内や中国の雑誌に発表した記事を取りまとめ、データ化し、その内容を分析し、当時の日中女性交流史の様相を明らかにすること。

これらの調査・分析を取りまとめて、各自自らの研究フィールドにおいて考察し、論考にまとめること。学会発表を経て、客観化したうえで論文化し、一次資料ともに、研究に寄与するために公刊すること。

３．研究の方法

（１）先行研究の確認

まず竹中繁をよく知ることである。先行研究書・香川敦子『窓の女　竹中繁のこと』（新宿書房、1999 年）を熟読し、参考文献を取りそろえること。竹中が身を置いた女子学院や東京朝日新聞社、交流のあった友人、作家や要人たち、社会背景など関連した資料を収集し、基礎データを収集すること。三か月に一度はその成果を研究会で発表し合うこと。（以下、研究会はこのペースで定期的に行う）

（２）史料の収集とデータ化、記録化

竹中繁の遺族のもとに残されていた遺族の許諾を受けた肉筆日記のみならず、残されたメモ類、書簡を可能な限り判読し、復元可能なものをデータ化、記録化すること。

名刺なども交流史の貴重な資源なので、書簡同様に写真撮影などを行い記録化する。また、竹中繁が国内外で発表した雑誌や新聞雑誌記事を収集し、整理し、データ化すること。

（３）詳細で綿密な注釈をつける

データ化した日記を熟読し、難解な用語、たとえば当時の社会制度、文化、周った教育機関の解説を行う。日記に記された中国の主要都市で出会った、人物の詳細を綿密に調べ、その関係の網の目を見る作業を通じて、交流史の細かな様相を見出すこと。

（４）インタビュー

竹中繁は 1940 年にも中国を旅行しているが、記録に残してはいない。同行者は女性婦選運動家で、政界でも活躍した市川房枝であり、彼女との交流は亡くなるまで続いた。市川房枝の養女である市川ミサオさんと、竹中繁令孫であり、史料保存者である稲葉幸子さんに、私たち研究メンバーが、実際の竹中繁、市川房枝のエピソードを聞き取り取材を行う。それを座談会形式で原稿に起こすこと。

（５）成果発表

以上の調査や作業を終えた段階で、各自の専攻にそってテーマを立て、論考を口頭発表し、質疑応答を受けて、客観化したうえで論文化すること。その論文と日記注釈、収集した竹中の記事、主要事項解説、年譜、書簡など未公開の一次史料をとりまとめて、竹中繁を中心とした近代日中女性交流史のジェンダー構築の研究書として公刊する準備を調えること。

４．研究成果

（１）パネル発表

2016 年 12 月 18 日に武蔵大学江古田キャンパスで行われた「ジェンダー史学会」で、研究メンバー5 名全員により、「一人の日本人女性記者が見た近代中国」というタイトルの下でパネル発表を行った。質疑応答によって、本研究の客観化が可能となった。

研究メンバー各自の発表タイトルと内容を以下に記すことで、本研究の成果としたい。

Ⅰ「本研究の目的と意義―ジェンダー・ナショナリズム・国際主義の視点から」

（石川照子）

竹中繁（1875-1968）は東京朝日新聞初の女性記者であり、市川房枝をはじめとする日本の女性運動家たちとの関わりも深い人物である。

彼女は 1926－27 年の半年間中国を旅行し、帰国後には中国を知るための会（一土会）を結成し、日中双方の新聞・雑誌に互いの女性の状況について寄稿するなど、国家間関係の悪化のさなかに、日中の女性同士の相互理解、連帯を目指した活動を行った。こうした活動を行った日本人女性ジャーナリストは、他に例をみない。

本研究は、竹中繁の日記、書簡や記事の分析を通して明らかになった竹中繁の活動とその意義について考察したものである。

竹中繁が大連、北京、天津、上海、香港など、沿岸部の都市を中心にまわった半年間の旅行中、ほぼ毎日記した「中国旅行日記」は、旅行の記録であると同時に、竹中が数多くの中国の女性たちと語り合い、互いに理解を深めた記録でもあることが明らかになった。旅行中に出会った女性たちとは帰国後も手紙のやりとりがあり、竹中の遺品には数多くの書簡が残されている。これらもまた日中女性の交流を示す貴重な史料である。

帰国直後には中国の女性の「真面目な努力と奮闘と質実な歩みをつゞけて行くところ」に、畏敬の念さえ抱くに至っている。この経験は、中国女性との交流・連帯への強い希望となり、竹中の活動の基盤となった。本研究を行った結果、ジェンダーとナショナリズム、国際主義、日中両国のナショナリズムの台頭、日中全面戦争の勃発、その中における女性同士の連帯という国際主義の模索と苦悩を体現、とりわけ「日中女性関係史」という視点の有用性（“一国女性史”の克服）が見えてきた。さらに、日中関係史の再構築、1920・30 年代における日中両国のナショナリズムの高揚、日本の帝国主義化の進行、悪化する

両国関係、その中における日中女性の連帯の模索と努力（と挫折）という史実は日中関係の知られざる側面を照射し、また、日本文学研究への新たな視座の提供および、中国をみつめる多様な視点が本研究から見えてきた。

Ⅱ「本研究の背景－日中関係について－」
（藤井敦子）

20 世紀初頭は、日清戦争後の日本留学熱がわいた。中国では、日本への反感よりもむしろ、短期間に国力を高めた日本への関心の高まり、日本の改革に学ぶため留学生を送る。日本においては、ロシアとの対立により、清朝との関係改善が急務であり、日清提携が叫ばれ、留学生を招聘した。

だが、両国においては日本人＝近代化の遅れた国として中国を認識し、留学生は日本に表れる西洋近代化の姿に憧れて留学していた。このように中国人留学生と日本人とのあいだのすれ違い、思惑の違いがあり、交流の難しさが露呈していた。

竹中繁は幼稚園の保母、教会施設での英語教師、女子学院の寄宿舎舎監、東京朝日新聞の女性記者という経歴をもち、幅広い層の女性に接触・関心をもっていた。

彼女の最初の中国への関心は 1922 年、女性だけの観光団として中国へ初の海外訪問であり、また、中国人女子留学生の寄宿舎舎監を務める服部升子の話、それはつまり、せっかく留学してきている中国からの学生たちは、決して日本の理解者にならないばかりか、反日家となって帰国するという現実の姿である。竹中は中国の実情を知り女性たちと交流する必要性を痛感した。

日本の女性知識人たちの関心は、欧米の女性論であり、中国の女性知識人たちの関心も欧米の女性論であった。日中間の女性同士の交流、連帯意識の欠如があり、竹中は、日本の女性が中国の女性のことを知り、中国の女性にも日本の女性のことを知ってもらうことを目指した。本研究は、その実践の記録を明るみに出すことができた。

Ⅲ「竹中繁の中国旅行と帰国後の活動」
（須藤瑞代）

竹中繁は 1875 年 11 月 1 日に東京で出生し、父は司法省官吏であった。1888 年、桜井女学校に入学（翌年「女子学院」と改称）し、矢島楫子の薫陶を受け、英語が堪能となった。1895 年に女子学院高等部卒業、洗礼をうける。

1901 年に英語塾のブラックマーホーム勤務、1905 年にのちの内閣総理大臣を務めた鳩山一郎が英語塾に習いに来たことで知り合い、竹中と恋愛関係になり、1907 年に未婚のまま男子を出産した（養子にだす）。その後女子学院に戻り、舎監になる。1911 年女子学院退職。『東京パック』社入社 11 月、東京朝日新聞の通信員になり、翌年に東京朝日新聞の社員となった。

彼女の遺した中国日記の中国旅行帰国後に女性グループの組織、月曜クラブ・一土会を開催し、中国のことを学ぶことに時間を費やした。その成果を文筆活動、日本の雑誌に中国の女性について執筆し、中国の雑誌に日本の女性について執筆するという双方向的な活躍を行った。

中国旅行の同行者・服部升子は、1878 に福島県に生まれ、福島女子師範学校卒業。1901 年に日本女子大学創立と同時に入学。1904 年日本女子大学国文学部を卒業。1904 年 10 月から教師として北京に赴任し、豫教女学堂、淑範女学堂で教鞭を執る。10 年間中国に滞在した経験をもつ。1923 年、中華学生寄宿舎で留学生の世話、日華学会女子寄宿舎の舎監になる。

竹中と服部の中国旅行では、学校（約 100 校）、学校以外の施設（奉天同善堂や内外綿株式会社の工場、病院、監獄など）女性リーダー・女性論者たちと会見した。中でも『醒時報』記者・張維祺や、中華民国の平民教育の創始者・提唱者であり、香山慈養院（孤児などのための教育施設）を北京に作った朱其慧（熊希齡夫人）、そして孫文夫人の宋慶齡とは漢口の革命総司令部で対面している。また、上海の勤業女子師範学校校長、中華女子救国団団長、上海女子参政協進会の指導者であった朱剣霞とも会見し、女性運動について四時間語り合ってもいる。上海の訪問先は女子青年会、中華婦女節制協会、女子参政協進会などであった。

以上のように、女性記者・竹中繁を通してみた日中女性交流史の詳細が明らかになった。

Ⅳ「竹中繁の活動の意義－－北京大学初の女性教授陳衡哲との交流を通して」
（姚毅）

日中両国の女性の連携を模索してきた竹中繁と北京大学初の女性教授陳衡哲との交流に焦点を当て、竹中繁の活動の意義を浮き彫りにすると同時に「国家を超える」ことの困難をジェンダー視点で考察を行った。

陳衡哲（1893－1976）は、国費留学生として 1915 年に渡米し、ヴァッサー大学に学び、1920 年（30 歳）北京大学初の女性教授であり、1927 年から 1933 年第四回太平洋国際学会(The Institute of Pacific Relations)に中国代表として出席している。女性問題・平和問題に強い関心を抱き、竹中も「学識高い婦人で、北支における有数の学者」、「北平の婦人界に錚々の聞こえる陳衡哲女史」と高く評価している。陳衡哲からの手紙は竹中繁が所蔵していた。その内容は、中国を侵略してきた日本を「サタン」と形容し、深い悲しみと憂慮を書き記したものであった。「軍国主義者が中国で彼女らの姉妹に犯した過ちを何とか正すことを望む」(1933 年 3 月 9 日)と日本女性に期待する思いも手紙には託されていた。

陳衡哲は、最初は「連携」に積極的で日本

の女性達の平和活動に幾分寄与したが、日本の「志士仁人」であっても軍国主義が中国人にもたらした苦痛をその千万分の一も想像できない、と日本人による中国人の痛みと苦悩の共有の困難を表明した。さらに、もう 1 人の著名女性である劉王立明の場合も国家・民族を超える女性の連携に消極的であり、「平和」の虚偽性を明かした。

竹中は当時の日中女性交流を、男性が破壊し、女性が修繕しても決して「閉じられることのない」ための努力であると述べている。

結論として、国家・民族を超え、他者との共存ということは解決できない難題であり、戦争下による「姉妹」と「国家」は分断され、その立場性の相違は平行線のまま、もしくは一層懸隔していったことが、中国側の女性知識人との交流で明らかになった。

Ⅴ　「同時代日本文学者の体験記をもとに」（山崎眞紀子）

竹中繁の中国旅行は 1926 年 9 月～1927 年 2 月のことである。同時代の日本文学者の旅行記と竹中繁のそれとを比較検討することで、竹中繁の中国旅行日記の意義を検討する。

① 芥川龍之介の場合

1921 年 3 月下旬から 7 月中旬の約四か月間の百二十余り、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国旅行に赴く。訪問地は、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津である。

大阪毎日新聞社が芥川を派遣したのは、「支那は世界の謎として最も興味の深い国である。旧き支那が老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草（どんそう）の如く伸びんとして居る。政治、風俗、思想、有ゆる方面に支那固有の文化が、新世界の夫と相交錯する所に支那の興味はある。（略）近日の紙上より芥川龍之介氏の支那印象記を掲載する。」（『大阪毎日新聞』1921 年 3 月 31 日 4 面）との趣旨だった。

芥川は旅中に記事を書いて新聞社に送ることが責務だったが、多忙を極め約束が果たせずに帰国してから書き、『支那游記』（改造社、1925 年 11 月）にまとめる。

中国から帰国後に発表した芥川の中国を舞台にした作品は、『将軍』（1924 年 7 月）や『馬の脚』（1925 年 1 月）、『湖南の扇』（1926 年 1 月）などで、実際に中国を歩き、政治家や文学者などと会見し、生の中国に触れることで底知れぬ偉大なる存在感を感じたことを作品に描き込んだ。つまり、芥川龍之介は、赴いた先の風土を写し取る紀行文よりも、章炳麟、鄭孝胥、李人傑との会見によって得た、植民地化されている支那の現状を、小説として表現したのである。

② 谷崎潤一郎の場合

谷崎は二度ほど中国旅行を経験している。1 度目の旅行の帰国後は中国を借景として小説の中に盛り込んだが、二度目の 1926 年 1 月～2 月は上海だけに留まり、内山書店の店主である内山完造を介して、中国を憂える未来ある若き青年知識人たちと多く談論を交わした。『上海交遊記』（「女性」1926 年 5、6、8 月）には、この食事会の後に田漢と郭沫若は谷崎が宿泊しているホテルまで来て紹興酒を飲みながら、「現代支那の青年の悩み」を訴える場面がある。一度目の中国旅行と異なり、以降、谷崎は中国ものを書かなくなり、日本の風俗や古来の文化を作品に描きこむ作風へと移っていった。

③ 与謝野晶子の場合

与謝野寛・晶子『満蒙日記』（1930 年 5 月刊）にまとめられている与謝野夫妻の中国旅行は、1928 年 5 月 5 日～6 月 17 日に大連、旅順、金州、営口、遼陽、安東、奉天、内蒙古、洮南、チチハル、ハルピン、長春、吉林、撫順を周った。

特筆すべきは、1928 年 5 月 26 日チチハル城外で呉俊陞の妻(第二夫人・李氏）と中将・劉徳権夫人・馬氏）との会見である。呉夫人は「女子教育にも注意を払い、また、社会改良、貧民救済などに就いても真面目に考えてゐる」「徳望のある人」と晶子は記し、晶子は厚いもてなしを受けた。彼女は竹中繁とも親交があった。この会見の一週間後に、日本兵によって張作霖と共に黒龍江省督軍・呉俊陞爆殺された。このとき、晶子は宿泊先の奉天駅楼上で出くわしている。呉夫人の嘆きを想像し胸を痛めるが、「私達はこの事変についての色色の謡言蜚語の伝えられるのを聞いた。それは皆日本人として耳にするのに忍びないものばかりであつた。」と表現するのみであった。晶子の中国旅行は事変への沈黙として満蒙日記には封印されている。

④ 林芙美子の場合

『放浪記』の印税で、初めて中国に旅行した。1930 年 8 月～9 月にハルピン、長春、奉天、撫順、金州、三十里、大連、青島、南京、杭州、蘇州を旅して周る。彼女は中国を広大な大地、開放感ある場所として憧れ、生涯にわたって 7 回ほど中国に渡っている。

「哈爾濱散歩」（『改造』1930 年 11 月）では、「私は十日あまりの間に、ハルピンでは日露教会学校の日本人教師やロシア人教師、シベリア生まれの女性作家など多数会った」と、その名が連ねられている。

以上に見たように、竹中繁と同時期 1921 年～1930 年の日本文学者の中国体験記は、同時代風光明媚な景色を描写することや中国と日本の比較論よりも、現地で出会った人と人とのつながりこそが日本文学者の心をとらえ、彼らはそれを作品に反映していったといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

本研究の成果論文等は、研究発表以外にはまだ未発表であり、平成 29 年度科研費出版

助成による刊行、研究メンバー共著『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本』（研文出版）において発表される。既刊のものはない。

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　1　件）
①山﨑眞紀子、「一人の日本人女性記者が見た近代中国」、ジェンダー史学会、2016 年 12 月 18 日、武蔵大学江古田キャンパス（東京都・練馬区）

〔図書〕（計　1　件）刊行予定
①山﨑眞紀子・石川照子・藤井敦子・須藤瑞代・姚毅、「女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本」、研文出版、全 400 頁、2018 年 2 月（刊行予定）【平成 29 年度科学研究費助成事業（研究成果公開促進費学術図書）交付内定、課題番号：17HP5091】

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

６．研究組織
(1)研究代表者
山﨑　眞紀子（YAMASAKI, Makiko）
日本大学・スポーツ科学部・教授
研究者番号：00364208

(2)研究分担者
石川　照子（ISHIKAWA, Teruko）
大妻女子大学・比較文化学部・教授
研究者番号： 50316907

(4)研究協力者
須藤瑞代（SUDOU, Mizuyo）
姚毅（YOU, Ki）
藤井敦子（FUJII, Atsuko）
村上　衛（MURAKAMI, Ei）